

「眼晴」考

田口和夫

ヨキ能ノ、得手ニ向キタラシヲ、〔眼精〕  
ヲ出ダシテスベシ。(『風姿花伝』第七別  
紙口伝 『世阿弥・禅竹』による。)

この「眼精」は従来知られている諸本の表  
記が吉田本「タンセイ」、宗節本「がんせい」、  
世阿弥自筆本「がんぜい」と、ゆれていたた  
めに、その解釈も『十六部集評釈』では吉田  
本によって「善い能で、しかも自分の得意と  
する所の能を、十分に丹精をこめて演ずべき  
である」と解し、また『世阿弥集』では「感  
情」をあてられもした。しかしこれらはいず  
れも『世阿弥・禅竹』補注において、その文  
字を採用することを否定された論拠にしたが  
うべきであろう。同補注はまた「禪林の用語  
に『眼精突出』があるのを参照して『がんぜ  
い』に『眼精』を当て、懸命に精を出す意か  
と解したが、『がんぜい』が『せいれい』と  
同意に近い語なのかも知れない」と、あてる  
べき文字、その解釈に留保される所がある。  
ただ同本文頭注では「懸命になる意か」とさ

れたこともあって、たとえば田中裕氏による  
『世阿弥芸術論集』に「まなこをむきだして  
懸命に」とされ、『日本国語大辞典』にも同  
様の解とされるように前半の解が定解とされ  
ているとみられるのである。しかし、静韻で  
「世阿弥を読む会」のとき、担当してよみな  
おしたところ、「せいれい」(精髓に近い意  
『世阿弥・禅竹』)と同意かとみる後半の見  
解が妥当とかがえられたのである。  
まず、文字のあてかたについてふれておこ  
う。天正十七年本『運歩色葉集』には「眼精」  
とみえる。『日葡辞書』では二種の「ガッセ  
イ」をあげている。  
Ganxei ガンゼン (眼晴) Manaco fitomi  
(眼精) 眼の瞳  
Ganxei ガンセン (眼精) Manacono xeiitqi  
(眼の精力) 眼の力、または、精力。  
『邦訳日葡辞書』による。

これは訳者による漢字のあて方ではあるも  
の、意味からしても妥当なものだったとい  
えるだろう。では、能楽論においては、どの  
文字を採用すべきか。  
世阿弥の用例としては『花鏡』の「時節当  
感事」に「万人の見心を為手ひとりの眼精へ  
引き入る際也。当日一の大事の際也」(八九  
べ)があるが、これはもと仮名がきで文字の  
参考にはならない。管見では、禅竹の『五音  
三曲集』にみえる次の用例がよい参考になる  
とかがえられる。  
上代・唐物等の絵贊の類にも、すでに名  
を発しぬれども、其うちに於きても、悪き  
所かならずある也。されども、眼精を開と  
ころ、こんぜぬによりて、悪き所も隠る  
なるべし。(三七三べ)  
『金春古伝書集成』の同所の頭注では、こ  
の「眼精を開くを「弄ニ精魂、瞳ニ眼精」な  
ど碧巖録にも例が多い。眼を見開いてよく見  
ることと注する。この『碧巖録』の例は岩波  
文庫本によれば「眼精」であり、他によくひ  
かれる「眼晴突出」の例も「眼晴」となって  
いる。ちなみに松ヶ岡文庫蔵『碧巖抄』に  
「碧巖録・抄」にみえる「眼晴突出」の例でも「晴」  
であり、その注は「此僧目ヲミツケタ、モノ  
ヲ心得ザル顔也」というものであって、眼の  
精力より瞳(まなこ)の意で解しうるもので  
ある。「精」は「晴」の誤用といえよう。  
このような「眼晴」の用例が多出するのは  
道元の『正法眼蔵』であって、その中心は第

五十八眼睛であるが、第五十三梅華あたりに「アルヒハ古仏ノ眼睛ナリ」「梅華眼睛を開明なるべし」などと、「まなこ・ひとみ」の意に解しうるものがみられる。これらはそのまま「中心となるもの」「精髓」を意味することにのみなるのである。

さて、さきにひいた禪竹の用例は「眼精を開ところ、こんぜぬによりて」と「こんぜぬ」と同一所に使用されていることが注目される。

この語については香西精氏『世阿弥新考』所収「世阿弥の禪的教養」が峨山和尚の『山雲海月』にある「全底孤俊不<sub>レ</sub>混」に溯源をもつ語であることを考証されている。『世阿弥集』は『花鏡』「上手之知感事」の「混ぜぬ」の注でこれをもとめて「宇宙の根源的な実在は、あらゆる相対性を超越しており、完全に単一的で、混すべき他者がない」の意とされる。

この「妙」といふべき境地を「こんぜぬ」ということは、禪竹の語の解にも適用されよう。そうしてみたとき、「眼精をひらく」の解は単に「眼を見開いてよく見る」ではおちつかないのである。名作の絵賛でも「其うち」に「悪き所」がある。これを観客側が「眼を見開いて」みると解されるからである。そうならば悪き所がみえてきてしまう筈であろう。これは絵賛そのものの側がその精髓を開陳してみせているのでそれが至妙の境地であ

るために「悪き所も隠」れると解すべきだとかんがえるのである。

香西氏が指摘された『山雲海月』にはまた「悉皆孤俊風流底物也。眼睛也」（曹洞宗合書、語録一、十四べ）という表現もみえる。

混ぜぬ境地と眼睛とが同一の位相にあることの一証となしうであろう。蛇足ながら『正法眼蔵』に付されたよみ（『道元禪師全集』など）によれば、禪林ではこれをガンゼイとよみならわしているようである。

世阿弥のもちいる「がんぜい」も「ひとみ」とその転義——主要なもの・眼目の意で解しうるのである。別紙口伝の例は「よい能で、得意とする芸に適用している曲を、そのものも中心となるものを発揮して演ずるがよい」となるうか。『花鏡』「時節当感事」の文も「シテ一人の中心的演技へ集中させる」と解しうるのである。『世阿弥芸術論集』が「眼睛」と文字をあて、『花鏡』では「ひとみの中に収斂してとらえる一瞬の時機」と注されているのは、やや難解ながら、小解と同様の意なのであるうか。

静岡の会では、他にも興味ある見解が披露されている。別の機会をまちたい。

〔たくち かずお 静岡英和女学院短大教授・能楽研究所員〕